

きたせいか警戒心が強く、棚の下に隠れたり、食事のときも唸った。津覇さんも手を焼く始末だった。ところが、約1週間が経った頃には変化も。にゃんにゃん丸と絡み合ったり、ソファで一緒に寝たりするようになったのだ。それを確認した津覇さんは、ちゃちゃ丸の「本採用」に踏み切った。

津覇商店は約70年前に、津覇さんの祖父が開業。綾子さんは3代目店主だ。

一押し商品は、沖縄では珍しい岩手の南部鉄器。猫の置物や食器も販売している。

那覇市の市場猫ルポは28〜29ページに。

会社を支えた 3匹の猫の 見えない力

不動産会社の営業部長を務める猫がいる。扉を開けると、2代目営業部長、茶トラのチャイ(推定3歳、オス)と、職員のぴい(同11歳、メス)が出迎えてくれた。

とまとハウジングは今年で創立20年。なぜ、猫が営業部長に就任したのか。しかも2代目。代表取締役の川端ゆかりさんが、忘れ得ぬ1代目営業部長チャイとの出会いを教えてくれた。

2000年のその日、川端さんの運命は変わった。客を案内する

住宅のガレージに、汚れた茶トラの子猫が落ちていた。「早く動物病院に連れて行かないと……」。焦りが勝り、どう案内したか覚えていない。気づけば、獣医に「育てる気はあるの」と尋ねられ、「育てます!」と答えていた。

川端さんは実は猫アレルギー。苦肉の策で、猫をお店に置くことにした。毛の色にちなみ、チャイと名付けた。

「気が強くて、毎日1時間の散歩を要求して、リードをつけて練り歩く俺サマ猫。飛行機の音で建物が揺れると、外に出て背後を庇って威嚇するんです。私たちを守るうとしていたのかな」(川端さん)

程なくサビのメス、ぴいを保護する。車道の路肩に寝る猫を心配し、車を止めて見に行くと、肩に飛び乗ってきたのだ。当時推定3歳。社員猫は2匹に増えた。

川端さんが仕事に邁進するなか、猫も仕事に勤しんだ。特にチャイはスペシャルで、猫嫌いだった取締役の安里成昭さんを籠絡。安里さんとチャイの散歩は日課になった。経営方針で意見が割れる日もあった二人の仲も円滑にした。会社は軌道に乗り、起業以来、経営は緩やかな右肩上がりだ。

16年、出会った時は子猫だったチャイも老いた。徐々に弱り、寝たきりになっても、安里さんの顔を見ると立ち上がろうとした。「チャイは、自分が散歩に連れて



津覇商店／那覇市
津覇にゃんにゃん丸
津覇ちゃちゃ丸

那覇の台所・第一牧志公設市場近くの津覇商店で「勤務中」の津覇にゃんにゃん丸(左)とちゃちゃ丸商店の陳列棚に仲良く並んでお客さんをお出迎え



とまとハウジング／浦添市
チャイ、ぴい

2代目営業部長のチャイ(右)とスタッフのぴい(左)。下の本の表紙、メガネをかけた茶トラが1代目のチャイだ。3匹は見えない力で猫なりに会社を支えてきた

ゆったりと のんびりと 限りなく自由

竹富島の民宿、新田荘。送迎車には福々しい猫の絵が描かれ、食堂には、歴代猫のアルバムがある。宿では、朝と晩、猫の食事の世話をしている。一時は10匹以上通ったが、いまは3、4匹だ。宿のおばあ、新田初子さんは言う。

「近所に強くて悪い猫がいてね。普通は喧嘩して降参したら終わりだけど、そいつは相手の猫がひどいケガをするまでやる。逃げて、戻って来なくなつた子もいます」

その日は、仲睦まじい白猫のオスとメス、はちわれのオスがいた。「みんな、ここで生まれた子たちですよ」(初子さん)

名前はみんな、ないという。この日の夕は、宿泊客の食事にも出た刺し身を、たっぷりもらっていた。晩は雨が降っていた。宿泊客の退屈を気遣って、酒を振る舞い、宿主の長史さんが三線を弾いて歌を歌い、食堂で三線ゆんたくを披露してくれた。初子さんも三板と歌で加わる。網戸越しの庭にほんやりと猫の姿が見える。

夜更け。はちわれが玄関に入ってきて、しきりに鳴いている。高く、少し掠れた特徴的な声だ。尻尾を立て、体をくねらせ、ついて

行ってあげていたつもりだったんでしょね」(同)

チャイとぴいが鳴き合い、引き継ぎをしているところも見た。最期の10日はつきっきりで看取った。4月、16歳だった。

会社の黎明期を支えた2匹が何を相談したかはわからないが、僅

か10日後、殺処分寸前の茶トラの成猫が知人の紹介でやってくる。迷わずチャイと名付けた。役職は1代目と同じ営業部長だ。

商談の前、川端さんは1代目チャイの写真に手を合わせる。不思議と心が落ち着く。人と猫が力を合わせて今があると信じている。